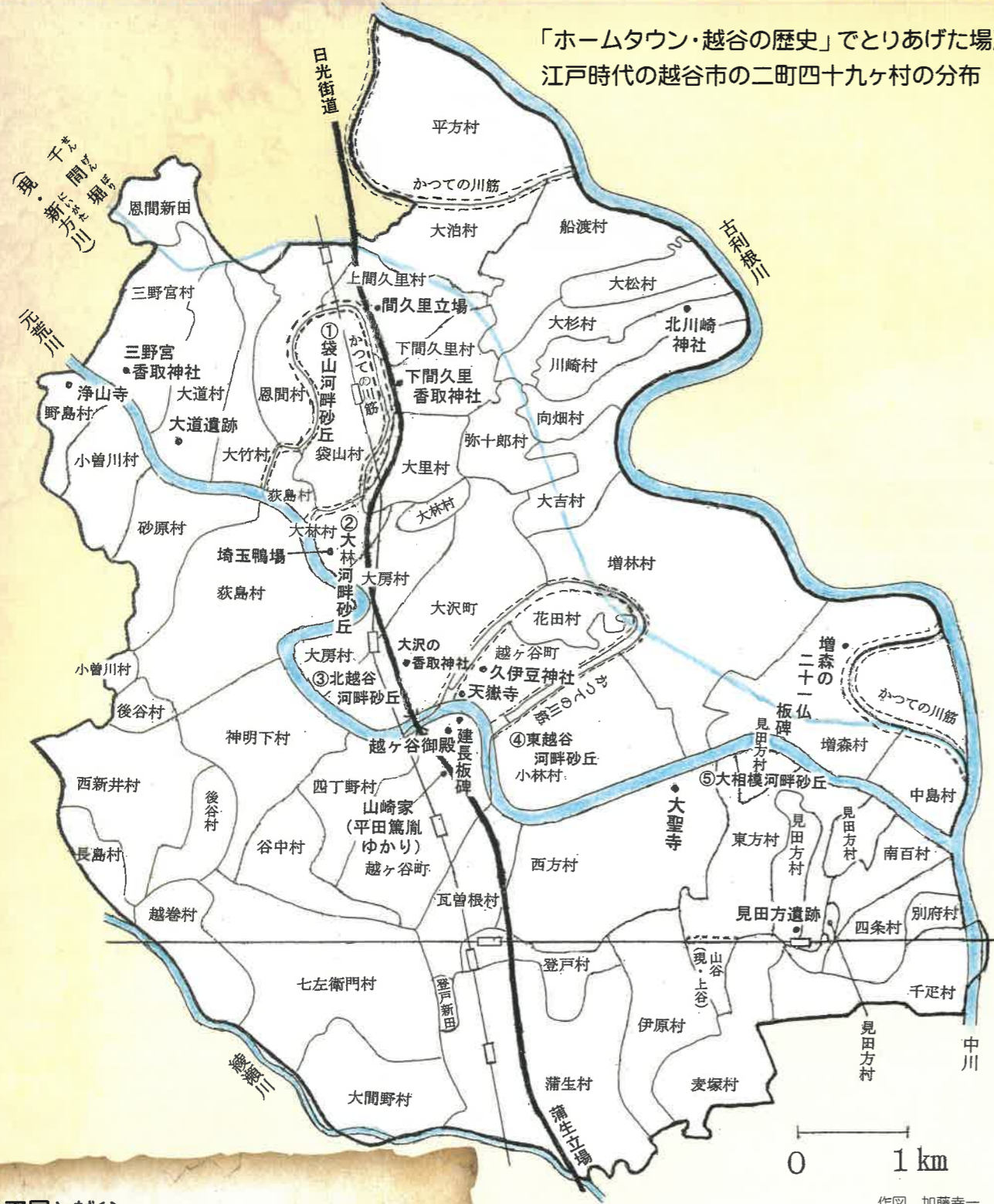


# ちょっと意外で、チョット楽しい ホームタウン・越谷の地図

NPO法人 越谷市郷土研究会・創立50周年(2015)記念

# ちょっと意外で、チョット楽しい ホームタウン・越谷の歴史

「ホームタウン・越谷の歴史」でとりあげた場所と、江戸時代の越谷市の二町四十九ヶ村の分布



## 千疋屋と越谷

あの高級果物店「千疋屋」の発祥は、実は越谷なのです。「千疋」というのは、越谷市の南東部の地名「千疋」に由来しています。以前は村名、バス停名などにあったのですが、最近は少なくなりました。いまの越谷市東町です。その出身の大島弁蔵が江戸時代後期に、当時、越谷の名産だった「桃」を舟運で江戸に運んで、「水くわし(菓子)安売り処」という看板を掲げ、売り出しはじめたのが「千疋屋」さんの発祥です。いまも新入社員研修で、「発祥は越谷」だと教えていただいているのが、うれしいですね。ちなみに、越谷は「桃」の花の名所、「桜」は小金井、「梅」は杉田(横浜市)というのが江戸の花の三名所でした。

平成29年1月  
編集・発行: NPO法人越谷市郷土研究会  
343-0818 越谷市越ヶ谷本町8-3  
048-962-2651  
編集委員: 新井敏浩・石井健治・内田文江・加藤幸一・秦野秀明・宮川進  
印刷: 有限会社カワカミ印刷



写真 林 宏一先生撮影

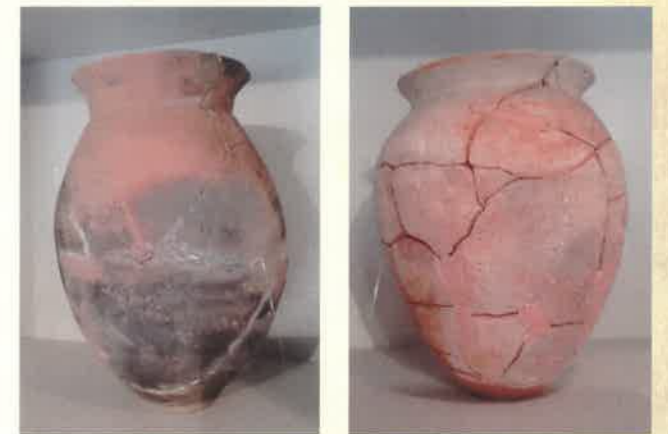
このお地蔵さまは、これまで、秘仏として、専門家の調査をうけていなかった野島の浄山寺の地蔵尊。3.11の大地震で倒れた際、収納されていた厨子が倒れ、足が折れました。それを修理される時の鑑定で「これは素晴らしい」と驚かれたのは林 宏一先生(元・県立博物館館長)でした。平安前期(10世紀、あるいは9世紀にさかのぼるか?)という関東でも屈指の古さ、そしてなによりも、この美しさ、気高さ……

越谷の歴史には、まだまだ、いろいろ知られていないこと、面白いことがあるかも知れませんよ~ということをお示しになっているような気がするお地蔵さまです。

平成28年8月、越谷市で初めて「国の重要文化財」に指定されました。

## 越谷の古代(古墳時代)

＝見田方遺跡＝  
越谷市は沖積低地という海拔平均5mのところであり、古代の遺跡などは存在しないと思われていました。しかし、昭和41年(1966)の発掘によって、古墳時代後期(「6世紀後半＝行田市のさきたま古墳群が造られていたころ)の住居跡などが発見されました。土師器や須恵器という土器や魚をとる魚網のオモリなども見つかっています。



見田方遺跡出土の土師器 写真・石井健治

## 越谷の古代(平安時代)

＝大道遺跡＝  
平成13年(2001)から、いまも発掘調査が続いています。平安時代前期(9～10世紀)からの土師器や須恵器、土師器を焼いたあとも発見されています。当時、京都では貴族は寝殿造りの建物で優雅な生活をしていましたが、一般のヒトたちはまだ竪穴住居にすんでいました。この平安時代は、浄山寺のお地蔵さまが造られた時代でもあります。



大道遺跡発掘現場 提供・越谷市教育委員会

# 越谷の中世（鎌倉時代・室町時代）

## 建長板碑

板碑は上部が三角形の石塔で、本人や家族の供養のために作られました。似てはいますが、墓石ではありません。鎌倉時代から作られ、最も古い板碑は旧・大里郡江南町（現・熊谷市）にある嘉禄3年（1227）のもので、そのわずか22年後に作られたのが、この越谷市の文化財に指定された建長元年（1249）の板碑です。市内最古で、最大（高さ155cm）。  
 阿弥陀如来を表す梵字という文字が大きく深く刻まれています。当時、このあたりを支配していた武士の供養塔で、県内・小川町で採掘された薄く剥がれて、板のように加工できる緑泥片岩でできています。  
 下部は大きく破損し、3分の1ぐらいが欠けていますが、舌のような形の先端部分があって、それを地中に差し込んで支えています。文字には、金粉製の金泥が埋め込まれていたようです。  
 板碑は全国でも埼玉県が一番多く、市内でも、このほかに多くの板碑が散在しています。



## 二十一仏板碑

京都、滋賀にまたがる比叡山の守り神、山王二十一社の神様を表わす本地仏（仏様）の梵字が二十一個刻まれた板碑です。山王二十一仏板碑ともいいます。二十一仏板碑は埼玉県南東部と、その周辺にだけ存在し、四十五基が確認されています。その中程に位置する越谷市では九基もあります。  
 そのなかでも戦国時代の終わり頃の天正3年（1575）に作られた増森の薬師堂のものは完全な形で残っていて、刻まれた梵字もはっきりしています。上部の左右には「申待供養」という文字が刻まれ、山王様のお使いの猿の信仰と結びついています。  
 それまでの武士の間で広まった板碑と違って、庶民の間で見られた二十一仏板碑は、江戸時代になって盛んとなる庚申塔の先駆けとなっています。（昭和36年（1961）に県文化財指定）ほかに東町の千疋南農村センターや、旧大房の稲荷神社でもみることができます。



このページの写真・イラスト・模写 加藤幸一

# 越谷の近世（江戸時代）



イラスト 宮川進



徳川家康

## 越ヶ谷御殿

越ヶ谷御殿は、将軍が鷹狩りなどの際の休息や宿泊としての施設でした。  
 慶長9年（1604）増林のお茶屋御殿（林泉寺付近とも城の上小学校付近と言われていますが、確かな場所はわかりません）から元荒川の自然堤防の小高い土地の上（会田出羽資久の敷地6町歩=18,000坪）に移転してきたのが越ヶ谷御殿です。現在の御殿町の辺で、元荒川は花田のまわりを迂回して流れ、天嶽寺・久伊豆神社とは陸続きでした。



江戸屏風絵 右隻 1扇より 三代将軍家光の鴻巣御殿の絵 <国立歴史民俗博物館蔵>

鷹狩りは、日本においては覇権の象徴でありました。江戸に幕府を開いた徳川家康は、鷹狩りの名目で、「新しい戦のない・法にもとづく・平和な・秩序ある社会の国造り、人々の暮らしが豊かで・安全な国造り」の為、道や河川の整備のため各地を巡察しました。家康の御殿・茶屋は全国で40ヶ所ありました。その中で、越ヶ谷御殿は特に好まれていたようです。江戸に明暦3年（1657）大火が起こり、江戸城も大方焼けてしまいました。その為、御殿は解体され江戸に運ばれ、江戸城二の丸御殿となりました。越ヶ谷御殿として54年の幕を閉じ、昔の建物は何も残らず敷地は林や畑地になり、御殿町という町名を残すだけです。  
 2代将軍秀忠は、とても越ヶ谷御殿がお気に入りだったらしく、幕府の基礎が定まった元和4年（1618）10月29日～半月、元和6年（1620）11月は1ヶ月も滞在しています。最後は慶安2年（1649）、4代将軍家綱（9歳）が大納言としての日光社参の時、行きに昼食のため御殿を使用、帰途越ヶ谷御殿にお泊まりになりましたが、その後使われていませんでした。



ハヤブサが獲物を捕らえた

日本野鳥の会が贈る 野鳥を楽しむポータルサイト BIRD FAN より



# 越谷 川が造った 砂丘のまち 国境のまち

## 砂丘のまち 越谷

越谷に「砂丘」があるのをご存知ですか。河畔砂丘という、川が運んできた砂が風で吹き上がってできた砂丘です。砂の分析によると、群馬県の榛名山の火山岩からできたものです。当時（平安時代後期ごろからあとか）、利根川は春日部市の古隅田川の流路を流れ、いまの岩槻区長宮あたりで荒川に合流していたと思われますが、その川の砂からできたものようです。元荒川の曲流治いに①袋山、②大林、③北越谷、④東越谷、⑤大相模という五つの河畔砂丘があります。規模は小ぶりですが、ひとつの地域としては、日本有数の多さです。

そのほか、自然堤防という、川が運んできた土砂で両岸にできた堤防のようなものも越谷ではあちこちにあります。幅広いもの、細いもの、点々となっているものなど、下図や最終ページの地図で自然堤防を見つけてください。



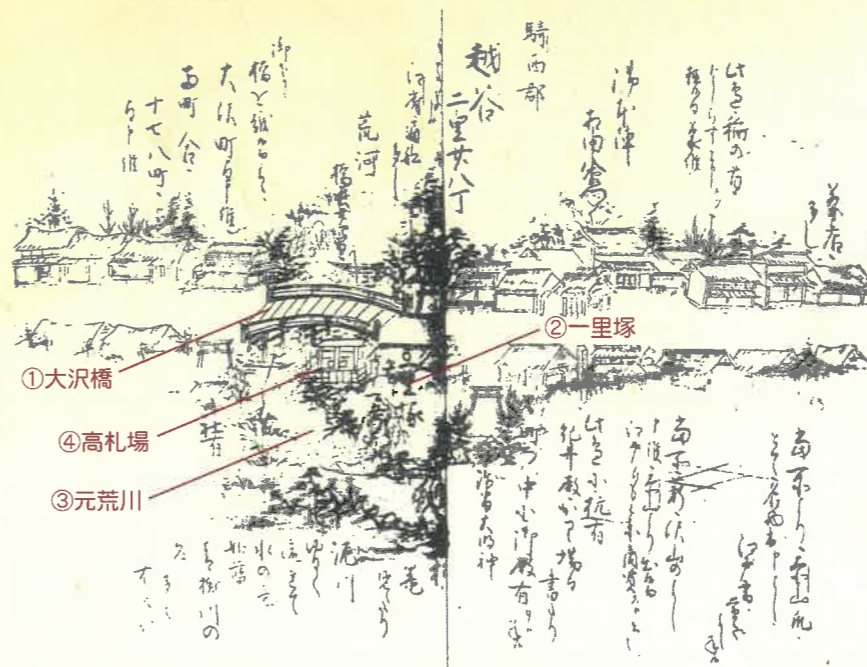
市内で最も高い標高9.7m 東越谷砂丘（東福寺境内）  
写真 秦野秀明

## 国境のまち 越谷

越谷では、以前は利根川の水も流れていたと思われる、いまの元荒川を境として、左岸（東）が下総国（主には千葉県、茨城県、埼玉県など）、右岸（西）が武蔵国（主には埼玉県、東京都、神奈川県など）でした。越谷は国境のまちだったのです。たとえば、大沢橋（もとは大橋と呼ばれていた）の大沢側は下総国、越谷側は武蔵国でした。そして、川の東には香取神社、西には久伊豆神社が分布しています。このように川が神社の領域を分けているのは珍しいことです。二つの例外は、袋山（A）と越谷（B）の久伊豆神社です。洪水を少なくするために、江戸時代中ごろまでに、川の首の部分をつまみすくにつないだので、この二つの久伊豆神社は元荒川の左岸側（東）になってしまいました。以前は間違いなく、川の西にありました。

市内の砂丘や自然堤防の上には古い神社やお寺があります。中世に数多く立てられた板碑もあります。市内で、いち早く、人々が暮らし始めた場所こそが、河畔砂丘と自然堤防だったのです。

# 日光街道（幕府の正式な呼び名は「日光道中」）



増補行程記 清水秋全作 宝暦1(1751) 国立国会図書館蔵

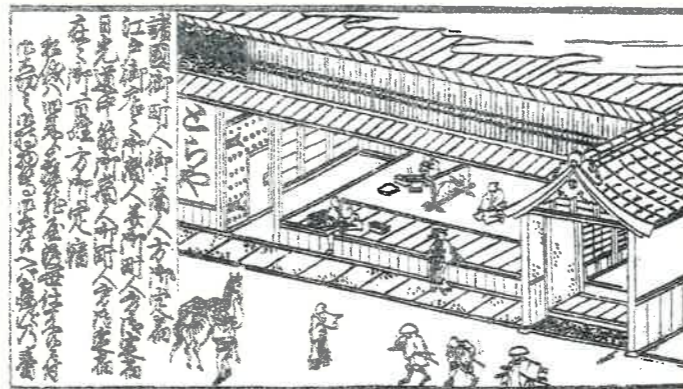
現在の越谷市のまともりは、家康の時代（17世紀はじめごろ）に制定された「五街道」のうちの日光街道と、その宿場「越ヶ谷宿」から始まりました。日光へ、奥州へと向かう旅人、参勤交代の一行が通る街道と宿場、近在の人々が暮らしの便利を求めて集まる市場が基礎となって「越谷」は始まったのです。

越ヶ谷宿は日光街道、三番目の宿場。起点・日本橋からおおよその距離は6里9町（約25km）。日光街道の一里塚は市内に三か所ありました。その中で今もわかるのは蒲生のもので、県の文化財になっています。また、草加宿と越ヶ谷宿の間には蒲生の立場（宿場と宿場の間にあって旅人のお休みどころがある）、越ヶ谷宿と粕壁宿の間には、間久里の立場がありました。本陣（宿場にあって大名など、エライヒトが泊まる場所）は天明年間（1780年ごろ）から幕末までは、大沢に置かれていました。

## 越谷の「心温まる」建物

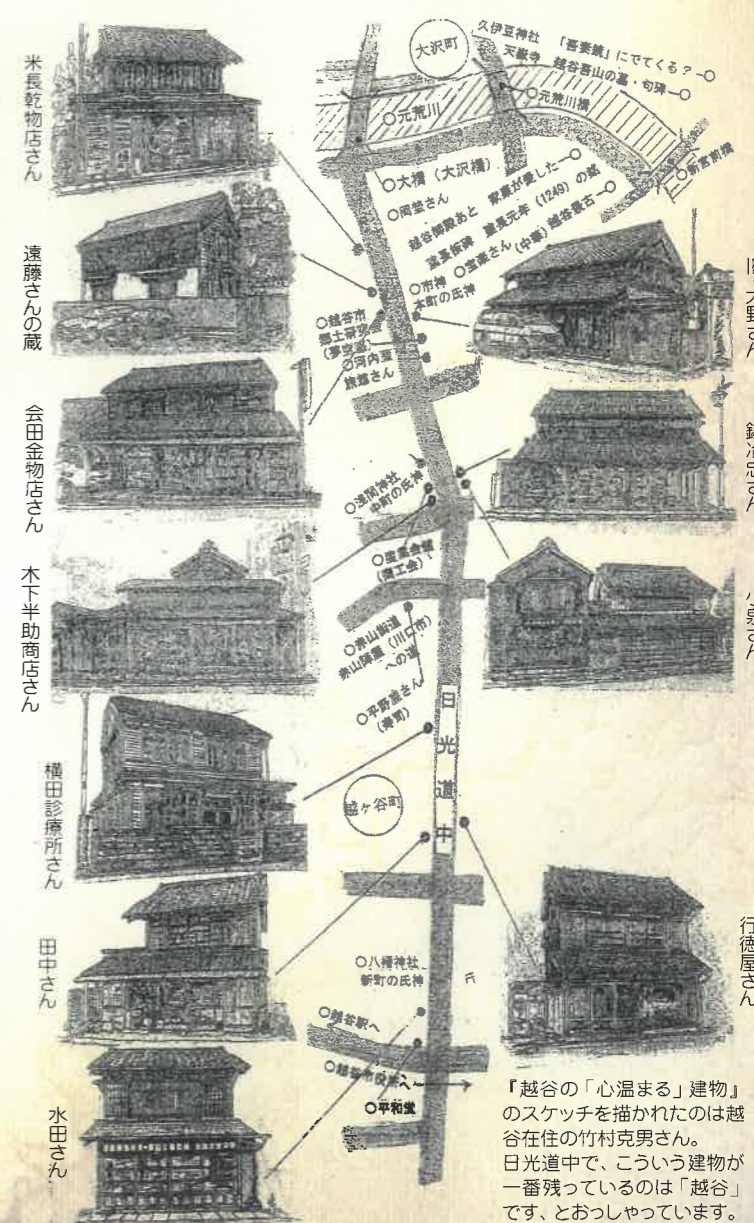


上図は、日光街道・越ヶ谷宿の入口（瓦葺根）にあった「中屋」さんです。「みみの薬」とありますが、「二八御めし」、「めんるい」「御料理」「御茶漬」などもあって、薬屋さん和食堂をかねたものだったのでしょうか。大相模不動尊への「不動道」との追分でもありました。

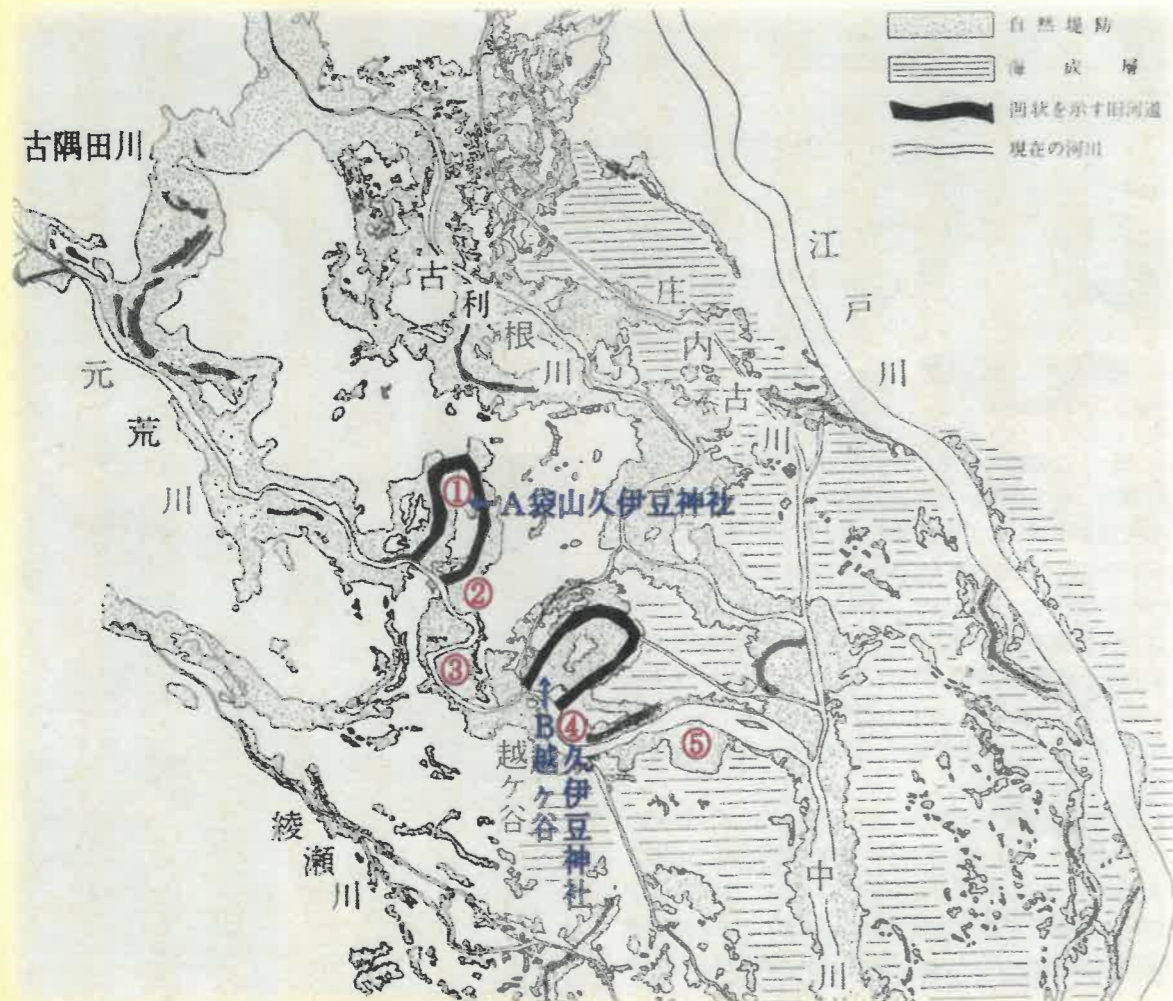


この図は大沢にあった「とらや」という旅籠です。この日光街道は十返舎一九描くところの弥次さん、北八さん、日光参詣の朝鮮通信使の一行、伊能忠敬、渡辺華山、そしてもちろん、参勤交代の北国の大名などが通っていった道なのです。

諸国道中人鑑 竹野半兵衛・壺井円水撰 花屋久二郎刊 文政10(1828) 国立国会図書館蔵



「越谷の「心温まる」建物」のスケッチを描かれたのは越谷在住の竹村克男さん。日光道中で、こういう建物が一番残っているのは「越谷」です、とおっしゃっています。



新井鎮久(1975)「越谷市史— 通史上」越谷市役所 p.52  
第16図「中川水系流域(中流部)における自然堤防の分布(国土地理院洪水地型分類図による)」より転載・加筆

# 日本一！三ノ宮卯之助

江戸時代、越谷生まれの日本一の力持ち、三ノ宮卯之助。

いまも神社の片隅などに置かれている「力石」をご覧になったことはありませんか。昔のヒトたちが力自慢を競い、持ち上げた石です。持ち上げたヒトの名が刻まれたものもあります。

卯之助(文化4年(1807)～嘉永7年(1854))は、力石を持ち上げて力自慢を競う時代に「日本一の力持ち」となった男。武州岩槻領三野宮(現在の越谷市三野宮)の出身です。瓦葺根の河岸で、荷運びをして力を鍛え、22歳で越谷市瓦葺根の最勝院で70貫(262.5kg)を持ち上げ、24歳のときには越谷の久伊豆神社に50貫余(約190kg)の力石を持ち上げて奉納しています。そして、一座を組んで各地を巡業しはじめました。

江戸力持ち番付では天保7年(1836)に西の関脇、29歳(嘉永元年(1848))には東の大関となりました。この年には郷里・三ノ宮で市内最重量の大磐石(520kg)を持ち上げています。嘉永5年(1852)には45歳にして、日本一の重さの大磐石(610kg)を桶川市稲荷神社で当地の紅花商人の招待をうけた時に持ち上げています。

## 三ノ宮卯之助が日本一と考えられる理由は～

1. 当時の力持ち番付の東の大関であった(当時の最高位)
2. 日本最重量の力石(610kg・桶川市)を持っている
3. 持ち上げたと確認される力石が最も多い。
4. 活動範囲も関東から近畿(姫路市・魚吹八幡神社)におよび、最も広い。

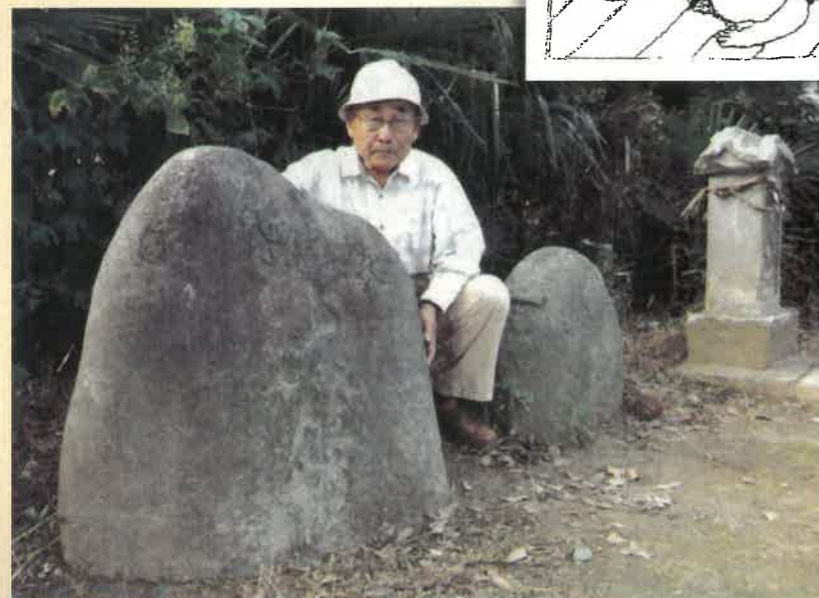
〈越谷市内の三ノ宮卯之助が持ち上げた力石が平成25年3月に市の指定文化財となりました。〉



姫路市魚吹八幡神社の卯之助石像スケッチ 新井敏浩



江戸時代の引札(チラシ) 高崎力氏 蔵  
中央下部で、足で馬と人物二人を乗せた舟を支えているのが卯之助



三ノ宮香取神社の大磐石と卯之助研究にもご尽力の高崎力氏(当会常任顧問)

# 越谷に関係あるひとたち

## 越谷吾山

享保2年(1717)～天明7年(1787)



越谷吾山  
「雪を花」(吾山一周忌追善書所取)の吾山肖像  
『方言に憑かれた男 越谷吾山』杉本つとむ著 さきたま出版会刊 H1)より

会田家の一門として、越谷に生まれ、「南総里見八犬伝」の作者として有名な滝沢馬琴の俳句の師でもありました。日本で初めての方言辞典「諸国方言物類称呼」の編集者として知られています。現在でも大学の「方言学」についての講義は「吾山」と「物類称呼」から始まるのです。

## 村田多勢子

～弘化4年(1847)

越谷・恩間の名主・渡辺荒陽の次女で、国学者・村田春海の養女となりましたが、父を助け、大名家の奥方、姫君へ歌道、古典を教えていました。当時、春海、多勢子が住んでいた江戸・地蔵橋の隣家の能楽者は浮世絵作者の東洲斎写楽であり、その息子を多勢子が養子として育てました。

## 平田篤胤とお里勢

平田篤胤:安永5年(1776)～天保12年(1841) お里勢:～弘化3年(1846)



平田篤胤  
『明治維新と平田国学』  
展示図録から(H16.10)  
国立歴史民俗博物館刊 2004.9

秋田生まれの国学者・本居宣長、荷田春満、賀茂真淵とあわせ、国学の四大人と呼ばれています。越谷の豪商・山崎長右衛門、小泉市右衛門、町(松)山善兵衛が、その門人となっており、特に山崎長右衛門は篤胤の出版費用のスポンサーでもあり、彼を招いて静養させたりしていましたが、折から、妻を失い、幼子を抱えて困っていた篤胤に継妻として、越谷のお豆腐やさんの娘・お里勢さんをめあわせました。その後、幕府にいらまれ、郷里・秋田に蟄居させられた篤胤に、お里勢さんはつきそい、苦勞を共にしました。

## 「下間久里の獅子舞」と「北川崎の虫追い」

越谷の年中行事として、埼玉県の指定無形文化財となっているのが「下間久里の獅子舞」と「北川崎の虫追い」です。

- 獅子舞は毎年7月の第3日曜日に下間久里で行われるもので、三匹の獅子に太夫や笛吹きが付き添って、集落の全戸を一日がかりで回るもの。夜の10時ころ、南の境界で、「辻切り」という悪霊が集落に入らないようにする儀式で終わります。春日部市銚子口、赤沼、野田市清水の三か所に、下間久里から17世紀代に獅子舞が伝授されたという記録があります。
- 虫追いは稲田から害虫を追い払うために、毎年7月24日の夕刻、「稲の虫ホイホイ」と叫びながら、大小さまざまの麦わらを束ねたたいまつを振り回して歩くという行事です。以前は、越谷市内のほとんどの集落で、この行事を行っていましたが、いまは、この北川崎だけになってしまいました。

## 越谷の鴨場

江戸時代から鷹狩の場所として、有名だった越谷にある埼玉鴨場ですが、直接の関係はありません。江戸時代の鷹狩は鷹を馴らして、鴨や鶴などを捕えさせるもので、埼玉鴨場での狩猟方法は鴨場の池に飛来した鴨を、飼育している合鴨を使って狭い水路に導かせ、水路のそばに隠れて「サテ網」を使って捕まえるというものです。宮内庁の所管で、土地買収によって明治41年に竣工、皇族や外国賓客の接待に使われています。狩猟方法の違いはありますが、渡り鳥の飛来地である越谷の特長が歴史をこえて生かされています。

## 越谷の古い社寺

- 越谷・久伊豆神社は鎌倉幕府の記録である「吾妻鏡」の建久5年(1194)の記述に「久伊豆神社人」という言葉が出ており、これを当社が鎌倉時代には存在した証拠であるとする説もあります。
- 大聖寺は寺伝によると天平勝宝2年(750)の創建とされ、東大寺大仏造立にかかわった良井が刻んだ二体の不動尊像のひとつを神奈川県大山寺に、ひとつを当寺に安置したのを草創の由緒としています。
- 大沢・香取神社は千葉県の香取大社を本社とした大沢・鷺代(東大沢1丁目)の香取神社が寛永年間(1624～43)に移転してきました。本殿北面の紺屋の仕事をあらわした彫刻などは、当時の様子を示す貴重な民俗資料です。